



## 北海道精神薄弱教育の基本理念に関する歴史的資料： 奥田三郎先生の著作から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学教育学部旭川校特殊教育特別専攻科障害 児教育研究室 公開日: 2017-07-26 キーワード: 作成者: 古塚, 孝 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00007912">https://doi.org/10.32150/00007912</a>

## 北海道精神薄弱教育の基本理念に関する歴史的資料

### —奥田三郎先生の著作から—

古塚 孝\*

北海道大学教育学部特殊教育講座の初代教授、奥田三郎先生の残された資料・著作の中から、昭和21年2月に青年学校先生に対して行われた精神薄弱者への「職業指導について」の講演資料と、昭和29年7月に精神薄弱児への特殊教育実施のためになされた「米国駐留軍施設無償拂下げ申請書」を紹介し、若干の補足を加えた。

(キーワード：障害児教育史 精神薄弱 特殊教育 北海道)

#### 1. はじめに

北海道大学教育学部特殊教育講座の初代教授、奥田先生が亡くなられてもう十数年を経ました。奥田先生は東大の心理学研究室を卒業された、1925年(22歳)の時に、石井亮一先生(わが国の精神薄弱者教育・治療教育の父といわれる)を訪ねられ、石井亮一先生との邂逅の中で治療教育に対する関心を掻き立てられたそうです(註1参照)。そして、1930年(昭和5年、28歳)には、小金井学園(園長城戸幡太郎・幹事奥田三郎・主事鈴木久雄、満6歳以上男子15名収容の精神薄弱児施設)創立に関わられています。1931年には松沢病院に精神科医として勤務されましたが、戦後郷土北海道に戻られ、遠軽家庭学校の運営に参画されています。

その後1949年北大教育学部の創設に城戸先生と共に関わられる傍ら、北海道の精神薄弱教育に関して偉大な足跡を記されました。例えば、北海道精神薄弱育成会の成立(会長城戸幡太郎、事務局長奥田三郎)等多くの実践的課題に取り組みられています。これらの業績の数々は、もう歴史の中に埋もれてしまっています。しかし、奥田先生の残されたメモ、ノートの中に精神薄弱教育の基本理念に関してキラリと光るダイヤモンドのような主張があり、それらはなお今日

的意味を持ち続けています。私はその中から二つの資料を報告したいと思います。

一つは太平洋戦争終結前の昭和21年2月7日に瀧野川区役所での講演の下書きです。多分、奥田先生は青年学校先生に講義をなさったのではないかと推測できます。題名は「職業指導について」となっています。戦争中にこんなことを話して逮捕されないのかという中味もありますが、戦争中の精神薄弱を始めとして精神障害者がどのように生活していたのかも窺えて興味深いものです。

第二は、1954年7月20日づけの「米国駐留軍施設拂下げ申請書」です。当時の北海道の精神薄弱者教育の実態と先生の構想が具体的に表されているものとして取り上げました。

奥田先生の著作には、厳しい、冷徹ともいえる現実認識がある一方で、精神薄弱者に対する人間性溢れる眼差しがあり、かつ、彼等の人権を尊重し、彼等の人生に干渉せず、対等の人間関係を持つとする先生の意図が如実に感じさせられ、心が洗われる思いが私の心にみなぎってくるものがあります。このことは、今想えば、ダウン症である我が娘真希子と晩年の先生をお訪ねし、娘が桃太郎のお話を先生におねだりした時、ベッドの上に娘と2人一緒に座られて先生がお優しい口調でお話下さったことから窺えるものであります。

\* 北海道大学

## 2. 奥田三郎先生文献1

講演下書き「職業指導について」

昭和21年2月7日

瀧野川区役所 青年学校先生に対する講演

一寸初めに御断り申し上げておかねばならないことがあります。本日の私の題目が「職業指導について」ということになっていますが、之は聊か羊頭を掲げて狗肉を売るに類するのであります。最初、主催者の方から依頼を受けました時は、精神薄弱者について話をするように、とのことでありまして、それなら約20年間に亘って手掛けたことですし、自信を持っているという程でなくとも、何か御参考になることを申し上げられるかと思つて御引き受けした次第でした。その時の御話では、青年学校生徒の中に、精神薄弱が多くて、その取り扱いに多くの方が困っておられるから、という風に御聞きしたのでした。それがかう一般的な問題としての職業指導ということになりますと、私の専門外のことでもありますし、また、理論的に今まで考究されたことを種々申し上げましても、余りに問題が広すぎまして話が抽象的慎重になります上に、目下の情勢が御承知の通り困難な時期に直面して居ります次第で、實際上どれ程御役に立ち得るか疑問であります。

それで私は御話の範囲を狭くして、精神薄弱の問題を中心として申し上げてみたいと思つます。御承知の如く、大東亜戦争が始まって以来、人的資源ということが宣しく言われ、国民総動員が行われ、それが徴用という形で大規模に行われました。そうして、徴用工員が最も多く要求された処は、いわゆる軍需会社と軍直属の工場等でありました。処がいざ徴用して配置してみますと、頭数だけ揃つてもなかなかうまく行かない、勿論、之には種々の原因があつたのですが、その一つに徴用工員の中に、いわゆる問題工員というものが沢山居つてこれが其の名の通り色々問題を起し、生産能率を挙げ得ないということがありました。問題工員というのは、身体虚弱者、事故頻発者、神経症にかかるもの、

不良工という様なものですが、特に最後の不良工が一番数も多く取り扱い上困つて之が生産能率を妨げることが少なくない。それで何とかしなければならぬという訳で、私たちの方に相談があり、私たちも之は国家の由々しき大事であるという訳で早速調査に取り掛かつたのであります。

何しろ調査すると言いましてもいずれも数千人から数万の工員を擁する大工場ですから、それを尽く調べるためには非常な年月がかかる、それでは対策が出来上がる頃には戦争は済んでしまうというので急がなければならぬ、併し私たちの方では、どうしても、一人一人について詳しく検査しなければ、明白な結論を得ることが出来ない、そうした矛盾した二つの要求がありまして、やむを得ず、工員の全部を調査することを断念しまして、会社の方で取り扱い上困難を感じ、不良工と認定したものを選択しまして、之に個別的に調査診断することにしたのであります。

私達の調査対象となつたのは、造船所一つ、製鋼所二つ、機器工場二つ、飛行機製作所二つですが、その結果だけを申し上げますと、之等の各工場にいわゆる不良工というのが10%居ります。これはどの工場でも殆ど差がありません。

次にこの不良工で、個別的検査が出来得ましたもの約500名につき内訳をみますと、正常人25%弱(1/4)精神薄弱が25%弱、性格異常者が50%、その外に本当の精神病者が1%、即ち、100人に1人居りまして、之は私達も意外に思った位ですが、他方興味ある事でもありました。この中、正常人というのは精神的に欠陥の無いもので、之が会社側から不良で困ると目された原因は、多くは家庭の状況に支配されたものであります。即ち、本人の意志や家庭状況を無視されて徴用令が出ましたため、徴用工になつたものの、収入がガタ落ちしてやつて行けない、それで会社を無断欠勤して、今までの家業その他をやつて収入を計り、会社から催促されても応じない、時にはかえつて反抗して、外の者に

も種々悪知恵をつける等の者なのであります。これが1/4, 精神薄弱は説明不要かと思いますが, 知力が足りない為, 間尺に合わない, それで組長や同僚から何だの彼だのと叱言を言われたり, 馬鹿にされたりする, その為不良となる, というのが大部分であります。性格異常は更に之を2大別出来, 大部分(4/5)は意志薄弱と名付くべきもの, 1/5が本当に正確に種々積極的・病的な異常を認めしむるものでした。精神病は躁鬱病というのが1人の外は全部精神分裂病でありました。で, かくの如き結果を得まして我々のたてた結論は徴用の最初に当たってもっとよく精神的検査を行い, 鑑別診断をせねばならぬ, 従来のやり方は全く十把一からげというやり方で科学的でないといういわば, 不良工員発生に対する予防的処置を講ずることが一つです。次に既に工員となって居る者に対しては, 一つの特殊な工場を作って, そこで生産作業に従事せしむるということです。

御存知の如く, 当時錬成ということが流行し, 各工場に錬成道場というものが設けられて居たのですが, この錬成道場というのが, いわゆる精神主義でして, ここにその不良工を連れてきて, 就中, 何をさせるかという朝早く起こして, 禱ぎをさせ, 種々の精神講話をする。厳格な規律生活をさせること等により改めて錬成の実を挙げようというのでその期間も1週間, 長くて3週間です。その期間が過ぎると又, もとの職場に戻すのであります。これで良くなるのが居るかという稀にはありますが, それは私達の診断上, 正常人たる者のみと申しても過言ではない, その外の者は元の木阿弥でひどい場合にはかえって悪化することもあるのです。之は私達の立場からすれば, さもあるべき当然の結論で, 精神薄弱や性格異常に因るものが, そんなに簡単に治る訳がないのです。

それに錬成道場がこうした不良工の錬成に用いられることが知れ渡っている処では, あいつは道場に行って来たという訳で恰も前科1犯を犯したと同様な眼で見られ, また, 本人もさう

思って益々不良工という風になるのであります。

それで私達の案としましては, こんな短期間の錬成, しかも工場生産活動から全く遊離したやり方は殆ど意味がないから, 特別な工場を設け, ここをいわば錬成工場として, ここをこうした不良工を收容し, 生産活動に従事せしめながら不良化防止を計ろうということになったのであります。これには指導者が, そうした精神欠陥に充分の理解を有する者でなければならない訳で, 従って大工場には必ずそうした人を配置し, 特殊工場を設けしむるというのが理想ですが, 実際問題として設備や経費の点もあり, 人も必ずしも簡単に見つける訳にも行かないので, 数工場が共同してそうした施設を作るのが良いであろうということになったのであります。その手始めとして先ず一つやってみようという訳で中島飛行機の某製作所と連絡しまして, その錬成道場に工場を付設しまして初めたのですが, 之が実に驚くべき能率を挙げて, 単位時間内に今までの不良工がいわゆる熟練工の3倍以上の能率を挙ぐる事が珍しくないという結果を示し, 製作所の責任者をして啞然たらしめたのであります。残念ながら, この工場は運転開始後半年経たない間に, 爆撃されることとなり, 中絶いたしました。ここの組織の基本は全部道場に寄宿せしめ, 規則正しい生活を送らせる訳ですが, 労働時間は午前2時間午後3時間の短い時間であります。これも適当に休憩時間を入れて, 彼らに共通なる易疲労性の亢進を防ぐようにしたものであります。

指導者としては技術者としては組長が一人来ておりましたが其の外には国民学校教員であった人が当たりその助手にもすべて教育に理解ある者が当たり, 個別的診断や指導等に問題が起こった時には, 私達が専門的立場より相談に与って居たわけであります。それで普通工場の工員が1日8時間労働で仕上がる個数の2倍を5時間でやってのけて, 結局3倍の能率を挙げるようになったのであります。

大体50人前後を收容しておりましたが, 此処

だけで2, 3の部品が充分に間に合う様になり、材料が無くなって午後から仕事がないということもままありまして、私達は喜ぶ一方、日本有数の飛行機会社がこのいわゆる不良工50人の生産に必要な材料を供給するのに追われることを心細く思ったものであります。

### 3. 奥田三郎先生文献2

#### 米国駐留軍施設無償拂下げ申請書

1954年7月20日

1, 申請者 札幌市北8条西5丁目北海道大学  
教育学部特殊教育研究室内

北海道特殊教育研究会

会長 北大教授 奥田三郎

1, 希望物件 所謂浦鉾兵舎 4棟

1, 使用目的 精神薄弱児を中心とする特殊教育実施のため

1, 申請理由

世の中で、無駄をすること程馬鹿げたことはないが、殊に人間性を無駄にすることは、絶対に許されるべきではない。処が、之が現実に行われているのが、日本、殊に北海道の現状である。即ち、適当な教育を施せば、相当に発達し、社会的生産に参加し得る筈の数多くの精神薄弱児が、放置されて顧みられず、無為に日々を送り生命を枯らしているのである。この無駄は、社会全般に対し復讐の形となって報いられる。数多くの教護少年、保護少年、常習淫賣婦、犯罪者の出現が、即ちこの無駄の報酬である。調査者によって、必ずしも率は一定しないが、之等の反社会的行為の最小限1/5から12以上が、適切に教育されなかった精神薄弱者によって、遂行されているのである。之等、社会的損害を假に考えないとしても、よりよく伸長すべき筈の生命を生長せしめず、結局歪曲矮小の姿に陥らしむる放置の罪は大きいと云はねばならない。

札幌市に限ってみても、義務教育該当年令の児童数約 65000名の中には、3%以上（之の数値は、諸学者の一致した見解である）の精神薄弱者が居る。即ち2000名以上居る訳である。之

に対する教育措置は如何？僅かに美香保中学の特殊学級（定員20名に満たない）1つがあるのみで、小学校には1つもないのである。

即ち、殆ど全部の精神薄弱児は、単に名のみでの登校をして、所謂「お客さん」として年月を送っているに過ぎない現状で、之は札幌市のみならず、北海道全部に亘って略々同様なのである。

この原因としては、財政窮乏による教室不足、教官定員の不十分が第一に取上げられるが、他方に於いては、特殊教育の積極的有効性を実証するに足る教育技術が必ずしも明白には確立されていないかの感を与え、この点からして、特殊教育に対する漠たる不信が懐かれていることも見逃せないと思われる。吾々が今回企画し実行しよう并希望している点は、実にこの不信打破に在るのである。

吾々の北海道特殊教育研究会は、1952年正月に有志集まって結成した純然たる民間の団体で全部会員の会費によって維持され、今迄3冊の機関誌を発行配布し、7回の研究集会を持ち、会長以下会員は、機会ある毎に各地区の研究会や講演に出かけて、北海道特殊教育推進に中心的指導的役割を果して来たものである。今回この会の1つの仕事として、精神薄弱に対し、最も必要な社会性の函養と職業能力の伸長とを中心とする有効適切なカリキュラムをつくることがある。そうして之を実施し、その有効性を実証し、この実証成績を示して精薄教育に於ける教育方法の基本を改正せしめ、前記の不信を一掃することによって現在不振の本道精薄教育を躍進せしめようと念願しているのである。このため、会員山本普（北大教育学部助手）が、実施上の中心指導者となり、会員菅原馬吉（前記美香保中学の特殊学級担任）、会員山下充郎（社会福祉法人、報恩学園主任）等と協力して、目下実行の準備を進めつつある状況である。即ち、生活日用品製作を中心教科とし、この中心カリキュラムに、巧みに、数学、読方等をも総合して、基礎学力の習得と同時に協会作業を通

じての職業適正の伸長及び社会性の函養を企図しているのである。既に、北日本ゴム会社（ゴム布の端片）や札幌飲料食品会社（空瓶）等より資材の無償譲受けの約束が出来、又市内の一部有志の家庭にも働きかけて、半端布片、毛糸、新聞紙、空瓶、空罐等の提供も受け得る態勢になっている。残るところは、之等の材料の置場所並びに多少餘裕のある学習工作場とであるが、教育関係者を主とする会員組織たる本研究会には、之を設備するだけの資力が全くないのであって、此点に於いて、ご配慮を仰度く、今回の申請を致す次第である。

猶、本研究会の企図には、精薄の早期教育を試みてこの効果を実証したいとの案があり、之には「楡の会」（之も民間婦人団体である）経営の北大幼稚園と提携して実行化する準備が進められているが、このためにも、普通児とは別な建物を要するのである。

更に、来年4月から教育学部附属高等学校が設けられる予定であるが、この学校職員と提携して、15・6才以上の精神薄弱者に対して特殊教育を試みたい念願である。この最後の点は、城戸教育学部長と内諾、諒解を得た程度で具体的準備には着手していないが、今回の申請が承認せられたならば、着々実現し得る見込みである。

要之、吾々としては、前記原則に基く教育方針により、（一）就学前児童、（二）義務学令期児童、（三）中学卒業生、の三年令段階のものに、それぞれ適合したカリキュラムを実施し、その教育効果を実証することにより、北海道のこの方面の振興、拡充を促し、本研究会の事業目的の一つを果たしたいのである。従来、放置されてややもすれば不良化の道を辿る処の多くの児童も、かくて、救済せられ、社会有用の人物になり得るのである。之等はすべて、施設、設備を要するのであるが、遺憾ながらこの財源を全く欠如している吾が研究会には、その力がないのである。それ故に敢て、この申請をして、ご配慮を煩はす次第であり、承認せられるならば、独り、吾々会員の喜びに止まらないであら

うと思うのである。

1954年7月20日

北海道特殊教育研究会  
会長 北海道大学教授  
奥田 三郎

#### 4. 障害者自身が肯定的に自己の人生を生きる

平成7年現在にあっても、障害児を持つ親達が、そして、関係する専門家達が一番気がかりなのは、障害者の成人後の処遇です。北海道においては、高等養護学校が充実しておらず、彼等の大部分は中学を卒業後、社会に出ようとするが、それは非常に困難なものになってしまっています。奥田先生の提案は実に此の点に集中され、彼等が成人して社会の中で自己の居場所を見つけ、自信をもって自己の人生を肯定的に生きることが出来るために何を我々はすべきかに関して、最も正しく妥当な見解を先生は提案なされています。この問題の解決とは「精神薄弱者に限らず、人にとって幸せとは何か、生きるとは何か」を問うことでもあります。このことに関して、昭和14年に著作された「精神薄弱の生活能力」から抜粋して先生の意見をまとめてみます。

#### 奥田三郎「精神薄弱の生活能力」（抜粋）

日本心理学会シンポジウム報告、昭和14年

吾国に於ける精神薄弱保護教育施設方面の、唯一の連合団体として、精神薄弱児愛護協会が存するが、既に、精神薄弱児という名称でも分かるとおり、此の協会への加盟団体13はいずれも基本旨を満18歳迄の児童に限って居るのである。勿論実際には20歳以上の成人も居ることは居るが、これは偶然の結果であり、それを歓迎しているわけではない。而して、右団体以外、吾国には成人せる精神薄弱に対する特殊施設は全くないのである。之を以てみても分かる通り、従来、吾国の治療教育は、満18歳までの精神薄弱をすっかり治して正常人たらしめ、そこで卒業せしめて社会に送り

返すのを主眼として居るかの如き外観を呈して居る。然るに精神薄弱が最も問題となるのは、彼らが成人したる時に如何にすべきか、であって、もし大部分の精神薄弱が成人とならずして死んでしまふか、逆に成人すれば全く正常人となる者ならば、それ程重大な問題とならない筈である。処が、事實は精神薄弱は、いつ迄経っても精神薄弱で、しかも相当以上に長命する者も可成り多く、之等が日常の社会に放置されている結果、種々の犯罪が増加し、然らずとも周囲に多くの負担と手数を掛けることになるのである。ここに彼らの社会的生活場面を変更するという第2の方向、私の社会的治療（注a）と名付くるものの必然性が生じる。之は、社会的保護、又は愛護と云つても差し支えないのであるが、治療という概念は、疾病と称せられる価値低下の状態を、正常又はそれに近づけるといふ意味を有する価値概念で、後述する如く、単なる保護よりも積極的意味を多く含んでいるのである。－（中略）－

今回の事変（支那事変？古塚）で、失明しまた、腕や肢を失った傷痍軍人に対する措置を考えてみても、之に義手や義肢を以て補うのは、いわば、第1の個人的治療（注b）であるが、それでも到底以前とは同一なる完全性に迄戻すことは至難であり、失明に到っては事に然りである。併しそれらの人々へ、不自由の儘でも可能なる仕事を見出して就職せしめ、適當なる指導と保護とを加え、以て人の生活を保証するということが残された最大の社会的治療に該当するのである。精神薄弱は、現在の社会生活場面裡に順応する能力に於いて失調を示すものであるから、特定の条件、特定の環境を有する特殊施設を作って、其処へ収容し、此処で彼らを一生保護すべきであるという点迄は従来も唱導されていたのであるが、これだけでは余りに消極的であり、實際問題として、国家なり、公共団体なり、乃至は当該家族がその費用を負担するすると

しても、容易でなく殆ど不可能に近いことになりはしないかと思われる。

それでどうしても、精神薄弱の生活能力を出来るだけ活用せしめ、生産的ならしめて、一方においては施設経営維持上の負担を軽減せしむると同時に、彼等自身、生産活動を通じて、自らの社会的存在価値を高らしめる様に工夫せねばならない。即ち、作業を中心とする特殊の集落を作り、かかる限局された社会条件下で、その生活能力を発揮せしむるべきである。此の如くして、彼等の個人的には有する欠陥もかかる一種の集団的社会組織に依つてある程度補われ、此集落内の生産活動を通じて、現実の世界に寄与することも可能になる訳である。－（以下略）－

（注a）社会的治療教育：生活場面を単純化し、変更して彼等を順応易からしむること、精神薄弱もその度に応じて生活場面の条件を単純化すれば、それに依つて生活能力が発揮できるのであつて、此際の生活能力とは、外部条件の適當なる調節によって最大限に活用される彼等の知能にほかならない。

（注b）個人的治療教育：彼らの知能をのばすこと、換言すれば彼等の生活要求を充足するに足るまでその内部順応力を伸ばすこと、精神薄弱個人の精神能力をその内部構造に即して、積極的に向上せしめようとするもの、個人的治療の方向には限度が存する。

奥田先生によるこの提案は科学的で厳密な現実認識その奥に、精神薄弱者に対する愛が貫かれているように思われます。實際、人は他人のため、社会のために生きていることを実感することが出来るのが幸せなのでありましょう。

精神薄弱者も、また、我々と同様に、自己の生存が社会のためになっているという実感の元に生きることが保証されて初めて、自己の生存を自己が許せるようになるのであります。實際、彼等の多くが初めて賃金を得た時（賃金を得る

ことは社会的貢献をなしたことの社会からの感謝の印であると私、古塚は考えます)、自分が社会の一員として生きる権利を得たと考え、自尊心と自己の生きる意味を把持するに到るという事実を、奥田先生は小金井学園と松沢病院での実践で、精神薄弱者から学ばれたと信ずる次第であります。

近年、医学・福祉の進歩ゆえに障害児の生存率が上昇し、かつ、障害の重度化が生じたと言われ、彼等はその重度性の故に社会で働くことは不可能で、只保護環境に置かれるのみで充分と判断されることが多い。しかしながら精神薄弱者の立場に立ってみれば、如何に重度であろうとも自己の生存を自己が許すことが出来るために何らかの社会への寄与をすることを可能にして貰わねばなりません。少なくとも社会が、他者が、自己の存在を許す証拠を得なければならないのです。この事は、又、ホスピス場面で、保護されるのみの立場に自己を置くことは生きるに値しないとする不治の病を得た多くの人々に出会うことから窺えるのです。そのために我々が精神薄弱者にすべきことは、奥田先生の言葉によれば、彼等の生活能力を彼等相応に發揮せしむる様に適当な条件を設けてやることなのです。このことは軽度精神薄弱にのみ適用可能なことでは無く、重度化に応じて適当な条件を彼等個々人に応じてきめ細かく設定し治すことなのです。

我々は未だ軽度・中度精神薄弱の問題をも解決し得て居ないことも考慮しなければなりません。刑務所収容員の平均知能指数は84であり(1994年北海道大学教育学部卒業生による特殊教育に関する金曜研究会討論より)、奥田先生の提起後50有余年を経た今も尚、日本の現状は変わっていないと、残念ではあるが考えざるを得ないのです。今こそ我々は「障害者自身が肯定的に自己の人生を生きる」という原点に戻って対応策を検討し直す必要があると言えましょう。

## 註1

奥田三郎先生が障害児に関心を持たれた経緯を知る上で重要な記事が「愛護」紙上に載っています。原文のまま掲載します。但しワープロの辞書にある単語で記述しました。

### 奥田三郎「石井先生への御礼と御詫び」

(愛護, 昭和12年, 第1巻2,3号)

日本に於ける治療教育の開拓者、代表者としての先生に対し国家的感謝を表するのは当然の事であるが、私は私自身個人的の御礼を此の機会に述べさせて戴きたい。

大正14年の初夏、学校を出たばかりの青二才だった私は何の紹介状もなしに瀧野川に先生を御訪ねした。目的は精神異常者の心理学的研究を始めたばかりで見当がつかないので有名な先生の処に行つてすこし教えて戴こうというのであった。先生は実験器械の沢山ある部屋で物静かに懇切に種々教示して下さいましたが、殊にこうしたいわば社会の消極的方面に自己の職場をもつ者の心得を恂々として語られた。モンゴリズムなどという言葉と同時に私が異常児に興味を有するに到った初めである。

其后、昭和2年秋、郷里で危篤に陥った母の看病中突然先生よりの書面が東大から回送されてきた。何事かと開封すると出てきたのは英語ばかりの紙片である。呆気にとられたがよく読むと私が神経学雑誌に発表したパフォーマンステストの中採点法の不能だったものに対する御教示で、親しくその採点法の原文をそのまま写して送られたものであった。私は前記の如く大正14年に瓢然として先生をお訪ねして以来そのまま、恐らく先生の御記憶から私の名は消えて居た筈である。

それなのに貧書生たる私の論文を読まれた上、御多忙中親しく相当長い原文を写されて送られるとは全く感激の極みでただ有難いと思ったのであるが、この后が悪いのである。

私は本当に感謝したのであったが、私の筆

無精に母の危篤による混雑疲労も手伝って、とうとう御礼状を出さずになったのである。

以後殆ど十年、私の心の一隅に常に苛責と  
なって存していたのであるが、殊に此の4、5  
年小金井学園に関係するようになり、先生の  
御消息を耳にする機会が多きに従って益々想  
起せられるのであった。先般、藤本兄に御話  
したのであるが、此機会に改めて御礼とお詫  
びを申し上げ、且つこうした私の恥を通じて  
先生の御風格の一端を一般にも御伝えたい  
のである。持てるものは総て之を頒たんとす  
る扶助的精神こそ治療教育に常ならんとす  
る私たちの体すべきことなるを先生を通じて  
親しく感じるのである。

## 謝 辞

狩野 陽北海道大学教育学部名誉教授の命に  
より、資料を世に出す任務を私たちは負って  
いました。今回、1994年度北海道大学教育学部  
部内科学研究費がつき、やっと日の目をみるこ  
とができました。メモ・ノートの中から精神薄  
弱に関する先生の信念の一端をお知らせ出来  
ること幸せに思います。

奥田先生の資料整理を献身的に行って下さ  
っておられる廣川淑子さん、古塚正恵さんに感  
謝の意を表します。また、本紀要にページを割  
いて下さった、私たちと同窓で、かつ、奥田先  
生の弟子である北海道教育大学旭川校の古川宇  
一教授、伊藤則博教授に感謝したいと思います。